

アスレティックトレーナーのイメージについての検討 ～ 第一報 ～

了徳寺大学健康科学部 整復医療トレーナー学科

上岡尚代・野田哲由・浦井孝夫

【キーワード】 アスレティックトレーナー、イメージ、質問紙法、
高校運動部員、AT養成課程履修1年生、AT養成
課程履修2年生

An Analysis of Cognitive Images of an Athletic Trainer

【Abstract】

The purpose of this study is to survey and analyze the cognitive images that the freshmen and the sophomores at Ryotokuji University as well as high school athletes have in common or in different ways on what makes a well-qualified athletic trainer.

A list of 4 questionnaires covering 1) knowledge, 2) skills, 3) manners and attitudes, and 4) ways of improving was conducted for not only 80 freshmen and 50 sophomores at college but also 48 high school athletes in 2008. The results of 6 diagrams indicate how differently three levels of students show their interests in 4 categorical questionnaires. We might find these differentiations might be remarkable between college students and high school athletes, and not always among college students. Consequently college students can be better minded in terms of their cognitive images of an athletic trainer.

【Key words】 athletic trainer, cognitive images, questionnaire,
freshman, sophomore, high school athletes

I. 研究の動機と目的

米国におけるアスレティックトレーナー（以下、「AT」と言う。）の歴史は、1938年に第1期の National Athletic Association が設立され、1950年に現在の National Athletic Trainers' Association が設立されたことに始まる。その理念は、「競技者および身体活動を行う人々に対する健康管理の質の向上、外傷・障害の予防、評価、処置およびリハビリテーションの領域において教育と研究を通して athletic trainer の職業的発展を図ることにある。」とされ、職業として確立されている。

日本では、従来米国の NATA 公認 AT のような、公認トレーナー制度や AT 養成校はなく、柔道整復師、鍼灸師、あん摩マッサージ指圧師などがスポーツ選手のサポートを担ってきた。(財)日本体育協会は、トレーナー制度を確立すべく、1994年に AT 養成事業をスタートしている。(財)日本体育協会では、公認 AT の役割を「医療関係の法律に抵触しない範囲でスポーツドクターとの緊密な協力のもとに、競技者の健康管理、スポーツ外傷・障害の予防と応急処理、アスレティックリハビリテーション、コンディショニングなどを担当すること。」という位置づけで、トレーナーを養成する方針を打ち出した。更に、2005年に公認スポーツ指導者制度の改定に伴い、公認スポーツ指導者養成共通科目カリキュラムは大幅に見直され、新たなカリキュラムがスタートしている。その中で「ATの役割とは」が明記された。¹⁾ つまり、スポーツ現場における AT の役割がますます重要味を帯びてきたのである。

そのような背景の中、了徳寺大学健康科学部整復医療・トレーナー学科（以下、「本学科」と言う。）では、平成19年度より AT の養成を開始している。AT 養成課程の担当教員は、AT を目指して入学する学生に対して、単に公認資格試験合格のための知識・技術を伝えるだけでなく、卒業後スポーツの現場で役立てる人材を養成することが求められる。(財)日本体育協会の公認 AT 適応コース認定校である本学科は、(財)日本体育協会が掲げた到達目標や必要な講義、演習、実技、実習などのカリキュラムに沿って教育計画が立てられている。スポーツ選手のサポートを行う為に必要な知識・技術を学ぶことができ

る内容がカリキュラムに組み込まれている。山本利春は、「ATに必要なとされる能力は机上の学習で養った知識や技術では不十分であり、選手の状況を的確に察知したアプローチの方法を微調整する応用力と技量が必要である。」と述べている。²⁾ また、浦辺幸夫は、スポーツ現場の医療チームで求められる人材は、①医療担当者としての専門性があり、責任を果たせる人。②フロントとの交渉をトラブルなく行える人。③指導者と良い関係を築ける人。④選手との信頼関係を築ける人。⑤社会の常識を知っている人。としており、更に「広く世間の常識を持ち、バランス感覚を持っていることや、情報収集に基づいた適正な判断が下せる能力が必要。」と付け加えている。³⁾

それでは、我々AT養成課程を担当する教員が4年間、そして卒業教育を含めてどのようにしてスポーツ現場で即戦力となる資質・能力を持つATを養成すればよいのであろうか。

担当教員は、常に学生達の学習効果を上げるための具体策を模索する必要がある。それと同時に、望まれるAT像を明確化し、必要な示唆を与えることが、より良いAT養成の創造に繋がると考える。

まず教育課題解決の第一歩として、学生の現在抱いているAT像について把握し、AT像の諸種の要素について、学生の認識が低い部分は認識を高める為の具体策が必要となる。その現状の把握として、学生たちが抱くATに対するイメージを調査、検討することが必要であると考えた。

したがって、山本、浦辺らの指摘を踏まえて本研究では、学生が現在持っているATに対するイメージについて調査し、調査した結果から得られたデータを解析し、今後のAT養成の示唆を得ることを目的とした。

II. 研究の方法

1) 調査対象

本学科のAT養成課程履修1年生80名(男女:19歳±1歳)(以下、「AT履修1年生」と言う。)、AT養成課程履修2年生50名(男女:20歳±1歳)(以下、「AT履修2年生」と言う。)及び東海大学附属浦

安高等学校運動部員 1、2 年生 48 名（男子 16 歳±1 歳）（以下、「高校運動部員」と言う。）とする。作成されたアンケート調査に基づいて、A T 履修 1 年生、A T 履修 2 年生及び東海大学附属浦安高等学校の運動部員を対象に実施した。全員（178 名）から直接回答が得られた。回収率は 100%であった。

2) 調査の手順

アンケート調査用紙を作成するための予備調査を実施した。予備調査では、本学科の学生に理想の A T 像、理想としない A T 像について自由記述方式による調査を実施した。自由記述方式の調査から得られた理想像を 4 項目に分類し、各々の項目に更に小項目を設けアンケートを作成した。このアンケート調査を実施し、得られた結果を検討した。

3) 調査の内容

自由記述方式の調査から得られた学生の A T に対する理想像を、「文部科学省高等学校生徒指導要録の各教科の評価の観点及び趣旨」⁴⁾と「(財)日本体育協会公認 A T 教育目標」を参考に「知識」、「技術」、「態度」、「方法」の 4 つの大項目に分類し、アンケート調査用紙を作成した。4 つの大項目に対し、更に 3 つずつ小項目を設けた。なお、各々の大項目についての小項目は以下の通りである。

1. 知識に関する大項目は、①身体に関する知識②運動の種目特性に関する知識③スポーツ外傷・障害予防に関する知識の 3 つの小項目とした。
2. 技術に関する大項目は、①スポーツ外傷・障害予防の技術②ウォーミングアップや疲労回復等の身体の調整（コンディショニング）技術③スポーツ外傷・障害の治療技術の 3 つの小項目とした。
3. 態度や行動の仕方に関する大項目は、①協力・責任・公正などの社会的態度②辛抱強さ・努力・尽くす姿勢などの個人的態度③安全に対する配慮・準備に対する態度の 3 つの小項目とした。

4. 指導方法に関する大項目は、①指導上の問題把握の方法②指導上の工夫の方法③指導上の成果確認の方法の3つの小項目とした。

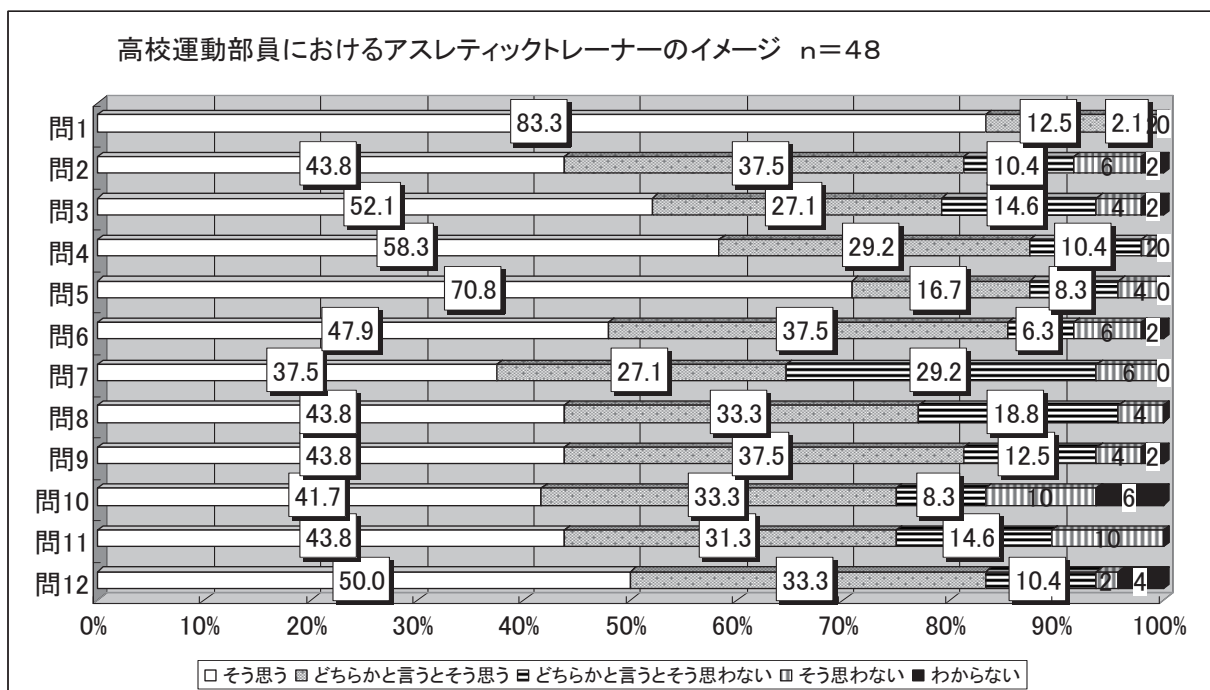
4) 回答及び考察方法

回答は「そう思う」「どちらかと言うとそう思う」「どちらかと言うとそう思わない」「そう思わない」「わからない」の5段階とした。考察にあたっては、各々の回答についての割合が80%以上を「かなり高い」60%から80%未満を「高い」40%から60%未満を「低い」40%未満を「かなり低い」とした。

また、比較においては30%以上を「大きな差異がみられる」10%以上30%未満は「差異がみられる」10%未満は「差異がみられない」とした。

3) 調査期間：2008年10月1日～10月31日の1ヶ月間とした。

III. 結果と考察



【図-1】 高校運動部員が抱くATのイメージ n=48

高校運動部員が抱くA Tのイメージについて検討した。

1 知識に関する回答についての検討

1-①「身体に関する知識が重要である」の質問項目については「そう思う」が83.3%、「どちらかと言うとそう思う」が12.5%、「どちらかと言うとそう思わない」及び「そう思わない」が4.0%となり「そう思う」の回答の割合がかなり高い。

1-②「運動の種目特性に関する知識が重要である」の質問項目については「そう思う」が43.8%、「どちらかと言うとそう思う」が37.5%、「どちらかと言うとそう思わない」及び「そう思わない」が16.0%となり認識がわかれ、「そう思う」の回答の割合が低い。

1-③「スポーツ外傷・障害予防に関する知識が重要である」の質問項目については「そう思う」が52.1%、「どちらかと言うとそう思う」が27.1%、「どちらかと言うとそう思わない」及び「そう思わない」が19.0%となり、「そう思う」の回答の割合が低い。

2 技術に関する回答についての検討

2-①「スポーツ外傷・障害予防の技術が重要である」の質問項目については「そう思う」が58.3%、「どちらかと言うとそう思う」が29.2%、「どちらかと言うとそう思わない」及び「そう思わない」が12.0%となり「そう思う」の回答の割合が低い。

2-②「ウォーミングアップや疲労回復等の身体の調整（コンディショニング）技術が重要である」の質問項目については「そう思う」が70.8%、「どちらかと言うとそう思う」が16.7%、「どちらかと言うとそう思わない」及び「そう思わない」が12.0%となり「そう思う」の回答の割合が高い。

2-③「スポーツ外傷・障害の治療技術が重要である」の質問項目については「そう思う」が47.9%、「どちらかと言うとそう思う」が37.5%、「どちらかと言うとそう思わない」及び「そう思わない」が12.0%となり認識が分かれ、「そう思う」の回答の割合が低い。

3 態度や考え方に関する回答についての検討

3-①「協力・責任・公正などの社会的態度が重要である」の質問項目については「そう思う」が 37.5%、「どちらかと言うとそう思う」が 27.1%、「どちらかと言うとそう思わない」及び「そう思わない」が 35.0%となり認識が分かれ、「そう思う」の回答の割合がかなり低い。

3-②「辛抱強さ・努力・尽くす姿勢などの個人的態度が重要である」の質問項目については「そう思う」が 43.8%、「どちらかと言うとそう思う」が 33.3%、「どちらかと言うとそう思わない」及び「そう思わない」が 22.0%となり認識が分かれ、「そう思う」の回答の割合が低い。

3-③「安全に対する配慮・準備に対する態度が重要である」の質問項目については「そう思う」が 43.8%、「どちらかと言うとそう思う」が 37.5%、「どちらかと言うとそう思わない」及び「そう思わない」が 17.0%となり認識が分かれ、「そう思う」の回答の割合が低い。

4 指導方法に関する回答についての検討

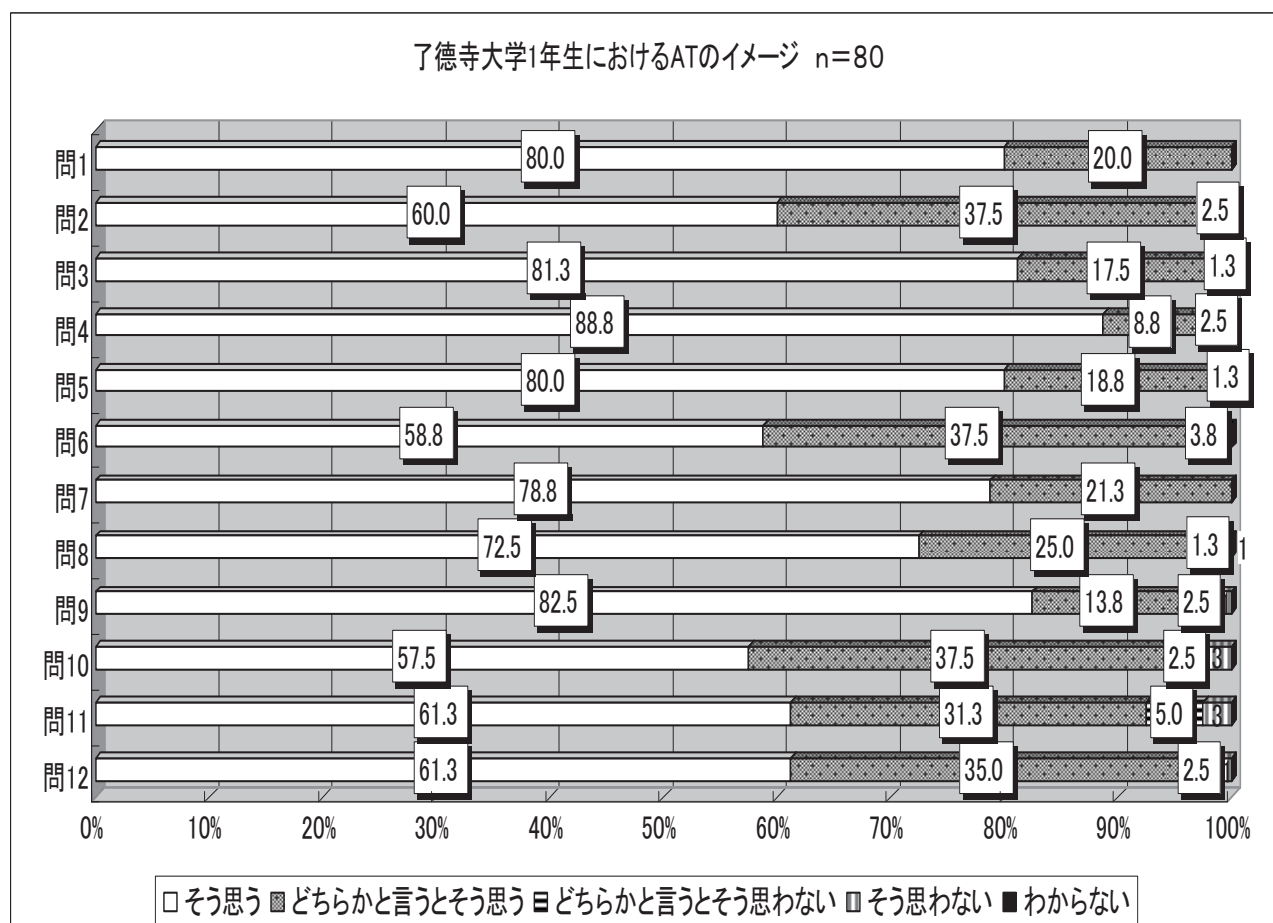
4-①「指導上の問題把握の方法が重要である」の質問項目については「そう思う」が 41.7%、「どちらかと言うとそう思う」が 33.3%、「どちらかと言うとそう思わない」及び「そう思わない」が 18.0%となり認識が分かれ、「そう思う」の回答の割合が低い。

4-②「指導上の工夫の方法が重要である」の質問項目については「そう思う」が 43.8%、「どちらかと言うとそう思う」が 31.3%、「どちらかと言うとそう思わない」及び「そう思わない」が 25.0%となり認識が分かれ、「そう思う」の回答の割合が低い。

4-③「指導上の成果確認の方法が重要である」の質問項目については「そう思う」が 50.0%、「どちらかと言うとそう思う」が 33.3%、「どちらかと言うとそう思わない」及び「そう思わない」が 12.0%となり認識が分かれ、「そう思う」の回答の割合が低い。

以上の結果を総括すると、「身体に関する知識が重要である」の項目については「そう思う」の回答がかなり高い割合を示すが、その他

の項目について、すべて「そう思う」の回答が有意でありながら、「どちらかと言うとそう思う」となり認識が分かれた。全体の項目からは「身体に関する知識」を最も重要と認識している事がわかった。



【図-2】AT履修1年生が抱くATのイメージ n=80

AT履修1年生が抱くATのイメージについて検討した。

1 知識に関する項目についての検討

1-①「身体に関する知識が重要である」の項目については「そう思う」が80.0%、「どちらかと言うとそう思う」が20.0%、「どちらかと言うとそう思わない」及び「そう思わない」が0%となり「そう思う」の割合がかなり高い。

1-②「運動の種目特性に関する知識が重要である」の項目については「そう思う」が60.0%、「どちらかと言うとそう思う」が37.5%、

「どちらかと言うとそう思わない」及び「そう思わない」の回答が3.0%となり「そう思う」の割合が高い。

- 1-③「スポーツ外傷・障害予防に関する知識が重要である」の項目については「そう思う」が81.3%、「どちらかと言うとそう」が17.5%、「どちらかと言うとそう思わない」及び「そう思わない」の回答が1.0%となり「そう思う」の割合がかなり高い。

2 技術に関する項目についての検討

- 2-①「スポーツ外傷・障害予防の技術が重要である」の項目については「そう思う」が88.8%、「どちらかと言うとそう思う」が8.8%、「どちらかと言うとそう思わない」及び「そう思わない」の回答が2.4%となり「そう思う」の割合がかなり高い。

- 2-②「ウォーミングアップや疲労回復等の身体の調整（コンディショニング）技術が重要である」の項目については「そう思う」が80.0%、「どちらかと言うとそう」が18.8%、「どちらかと言うとそう思わない」及び「そう思わない」が1.0%となり「そう思う」の割合がかなり高い。

- 2-③「スポーツ外傷・障害の治療技術」の項目については「そう思う」が58.8%、「どちらかと言うとそう思う」が37.5%、「どちらかと言うとそう思わない」及び「そう思わない」の回答が4.0%となり認識が分かれ、「そう思う」の割合が低い。

3 態度や考え方に関する項目についての検討

- 3-①「協力・責任・公正などの社会的態度が重要である」の項目については「そう思う」が78.8%、「どちらかと言うとそう思う」が21.3%、「どちらかと言うとそう思わない」及び「そう思わない」の回答が0.1%となり「そう思う」の割合が高い。

- 3-②「辛抱強さ・努力・尽くす姿勢などの個人的態度が重要である」の項目については「そう思う」が72.5%、「どちらかと言うとそう思う」が25.0%、「どちらかと言うとそう思わない」及び「そう思わない」の回答が1.0%となり「そう思う」の割合が高い。

- 3-③「安全に対する配慮・準備に対する態度が重要である」の項目に

については「そう思う」が 82.5%、「どちらかと言うとそう思う」が 13.8%、「どちらかと言うとそう思わない」及び「そう思わない」の回答が 3.7%となり「そう思う」の割合がかなり高い。

4 指導上の改善の方法に関する項目についての検討

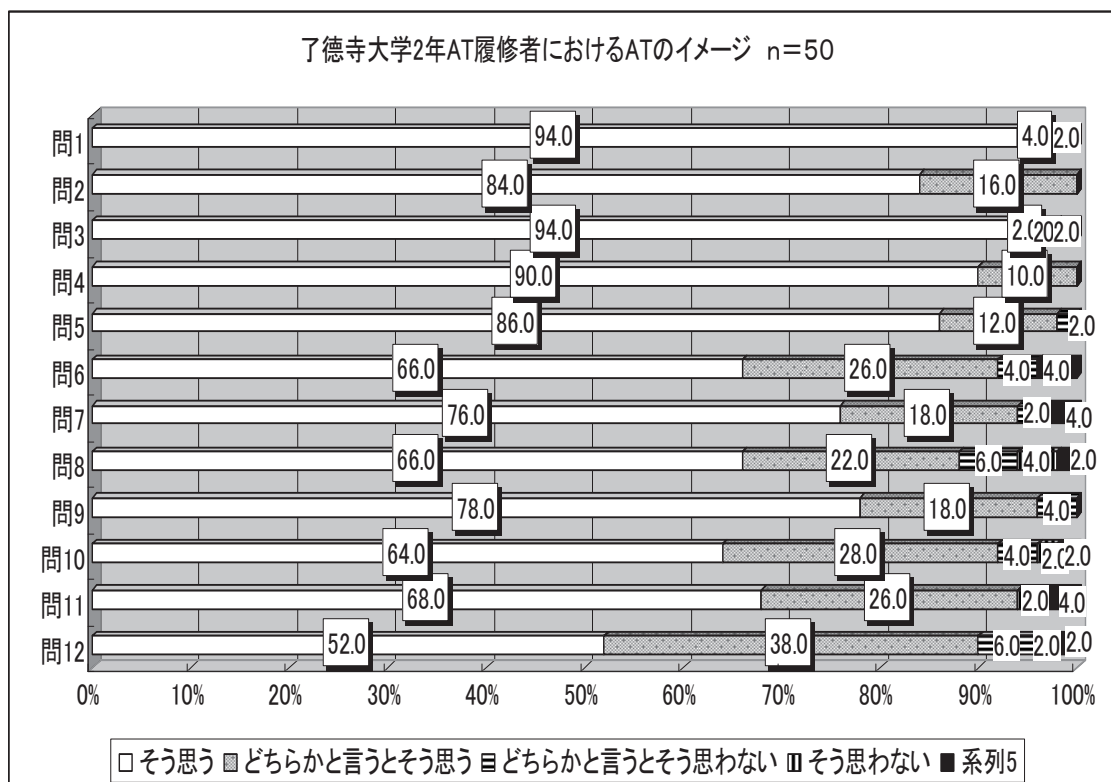
4-①「指導上の問題把握の方法が重要である」の項目については、「そう思う」が 57.5%、「どちらかと言うとそう思う」が 37.5%、「どちらかと言うとそう思わない」及び「そう思わない」が 5.0%となり認識が分かれ、「そう思う」の割合が低い。

4-②「指導上の工夫の方法が重要である」の項目については「そう思う」が 61.3%、「どちらかと言うとそう思う」が 31.3%、「どちらかと言うとそう思わない」及び「そう思わない」の回答が 7.4%となり「そう思う」の割合が高い。

4-③「指導上の成果確認の方法が重要である」の項目については「そう思う」が 61.3%、「どちらかと言うとそう思う」が 35.0%、「どちらかと言うとそう思わない」及び「そう思わない」が 4.0%となり「そう思う」の割合が高い。

以上の結果を総括すると、「身体に関する知識」「スポーツ外傷・障害予防に関する知識」「スポーツ外傷・障害予防の技術」「ウォーミングアップや疲労回復等の身体の調整（コンディショニング）技術」「安全に対する配慮・準備に対する態度」の重要性についてかなり高いと認識している事がわかった。

その反面、「運動の種目特性に関する知識」「スポーツ外傷・障害の治療技術」「指導上の問題把握の方法」などが他に比べ、「そう思う」の割合が低く、認識に相違がある事がわかった。



【図-3】 A T履修 2 年生が抱く A T のイメージ n = 50

A T履修 2 年生における A T のイメージについて検討した。

1 知識に関する項目についての検討

1 - ① 「身体に関する知識が重要である」の項目については「そう思う」が 94.0%、「どちらかと言うとそう思う」が 4.0%、「どちらかと言うとそう思わない」及び「そう思わない」の回答が 2.0%となり「そう思う」の割合がかなり高い。

1 - ② 「運動の種目特性に関する知識が重要である」の項目については「そう思う」が 84.0%、「どちらかと言うとそう思う」が 16.0%、「どちらかと言うとそう思わない」及び「そう思わない」の回答が 0%となり「そう思う」の割合がかなり高い。

1 - ③ 「スポーツ外傷・障害予防に関する知識が重要である」の項目については「そう思う」が 94.0%、「どちらかと言うとそう思う」が 2.0%、「どちらかと言うとそう思わない」及び「そう思わない」の回答が 1.0%となり「そう思う」の割合がかなり高い。

2 技術に関する項目についての検討

2-①「スポーツ外傷・障害予防の技術が重要である」の項目については「そう思う」が90.0%、「どちらかと言うとそう思う」が10.0%、「どちらかと言うとそう思わない」及び「そう思わない」の回答が0%となり「そう思う」の割合がかなり高い。

2-②「ウォーミングアップや疲労回復等の身体の調整（コンディショニング）技術が重要である」の項目については「そう思う」が86.0%、「どちらかと言うとそう思う」が12.0%、「どちらかと言うとそう思わない」及び「そう思わない」の回答が2.0%となり「そう思う」の割合がかなり高い。

2-③「スポーツ外傷・障害の治療技術が重要である」の項目については「そう思う」が66.0%、「どちらかと言うとそう思う」が26.0%、「どちらかと言うとそう思わない」及び「そう思わない」の回答が8.0%となり「そう思う」の割合が高い。

3 態度や考え方に関する項目についての検討

3-①「協力・責任・公正などの社会的態度が重要である」の項目については「そう思う」が76.0%、「どちらかと言うとそう思う」が18.0%、「どちらかと言うとそう思わない」及び「そう思わない」の回答が6.0%となり「そう思う」の割合が高い。

3-②「辛抱強さ・努力・尽くす姿勢などの個人的態度が重要である」の項目については「そう思う」が66.0%、「どちらかと言うとそう思う」が22.0%、「どちらかと言うとそう思わない」及び「そう思わない」の回答が12.0%となり「そう思う」の割合が高い。

3-③「安全に対する配慮・準備に対する態度が重要である」の項目については「そう思う」が78.0%、「どちらかと言うとそう思う」が18.0%、「どちらかと言うとそう思わない」及び「そう思わない」の回答が4.0%となり「そう思う」の割合が高い。

4 指導上の改善の方法に関する項目についての検討

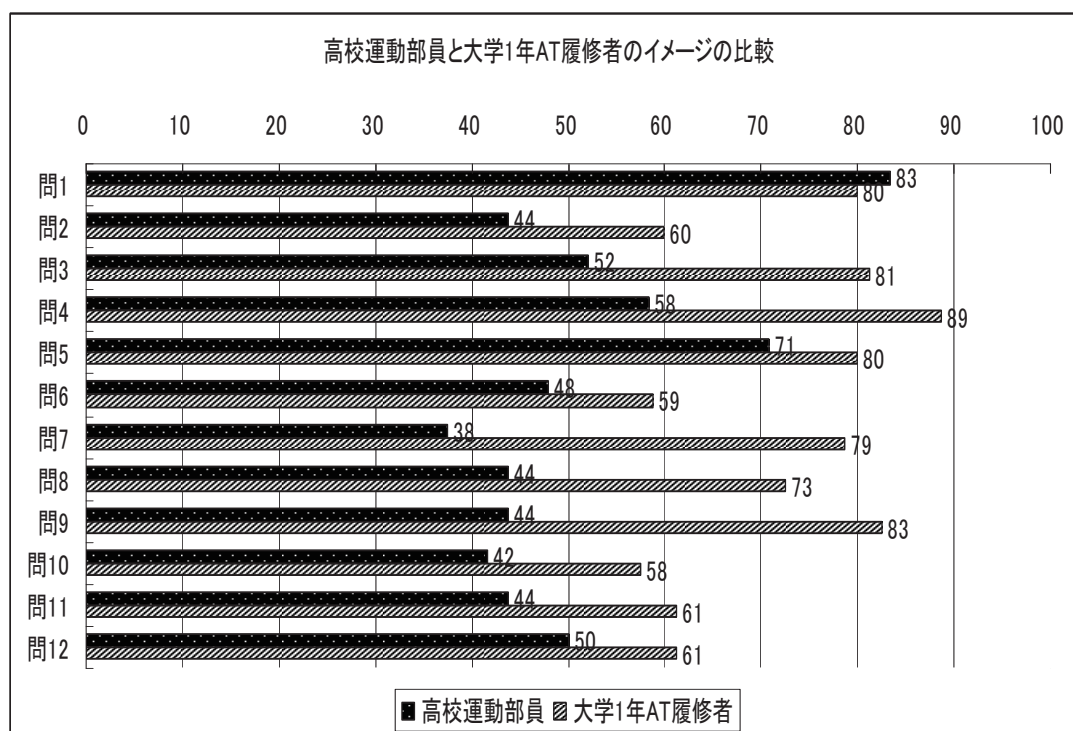
4-①「指導上の問題把握の方法が重要である」の項目については「そう思う」が64.0%、「どちらかと言うとそう思う」が28.0%、「どち

らかと言うとそう思わない」及び「そう思わない」の回答が 6.0% となり「そう思う」の割合が高い。

4-②「指導上の工夫の方法が重要である」の項目については「そう思う」が 68.0%、「どちらかと言うとそう思う」が 26.0%、「どちらかと言うとそう思わない」及び「そう思わない」の回答が 2.0% となり「そう思う」の割合が高い。

4-③「指導上の成果確認の方法が重要である」の項目については「そう思う」が 52.0%、「どちらかとうとそう思う」が 38.0%、「どちらかと言うとそう思わない」及び「そう思わない」の回答が 8.0% となり認識が分かれ、「そう思う」の割合が低い。

以上の結果を総括すると、「身体に関する知識」「運動の種目特性に関する知識」「スポーツ外傷・障害予防に関する知識」「スポーツ外傷・障害予防の技術」「ウォーミングアップや疲労回復等の身体の調整（コンディショニング）技術」など、知識面と技術面の重要性が高いと考えている事がわかる。その反面「指導上の成果確認の方法」については「そう思う」の割合が低く、認識に相違がある事がわかった。



【図-4】 A T 履修 1 年生と高校運動部員が抱く A T に対するイメージの比較

各質問項目の回答で「そう思う」と回答した割合をA T履修1年生と高校運動部員とで比較した。

1 知識に関する項目についての検討

1-①「身体に関する知識」の項目については、A T履修1年生が80%に対し、高校運動部員が83.3%となり、差異がみられなかった。

1-②「運動の種目特性に関する知識」の項目については、A T履修1年生が60.0%、高校運動部員が43.8%となり、差異がみられた。

1-③「スポーツ外傷・障害予防に関する知識」の項目については、A T履修1年生が81.3%に対し、高校運動部員が52.1%となり差異がみられた。

2 技術に関する項目についての検討

2-①「スポーツ外傷・障害予防の技術」の項目については、A T履修1年生が88.8%に対し、高校運動部員では58.3%となり大きな差異がみられた。

2-②「ウォーミングアップや疲労回復等の身体の調整(コンディショニング)技術」の項目については、A T履修1年生が80%に対し、高校運動部員が70.8%となり差異がみられなかった。

2-③「スポーツ外傷・障害の治療技術」に対する回答は、A T履修1年生が58.8%に対し、高校運動部員が47.9%となり差異がみられた。

3 態度や考え方に関する項目についての検討

3-①「協力・責任・公正などの社会的態度」の項目については、A T履修1年生が78.8%に対し、高校運動部員が37.5%となり、大きな差異がみられた。

3-②「辛抱強さ・努力・尽くす姿勢などの個人的態度」の項目については、A T履修1年生が72.5%に対し、高校運動部員が43.8%となり差異がみられた。

3-③「安全に対する配慮・準備に対する態度」の項目については、A T履修1年生が82.5%に対し、高校運動部員が43.8%と、大きな

差異がみられた。

4 指導上の改善の方法に関する項目に関する項目についての検討

4-①「指導上の問題把握の方法」に対する回答は、A T履修1年生が57.5%に対し、高校運動部員が41.7%となり、差異がみられた。

4-②「指導上の工夫の方法」に対する回答は、A T履修1年生が61.3%に対し、高校運動部員が43.8%となり、差異がみられた。

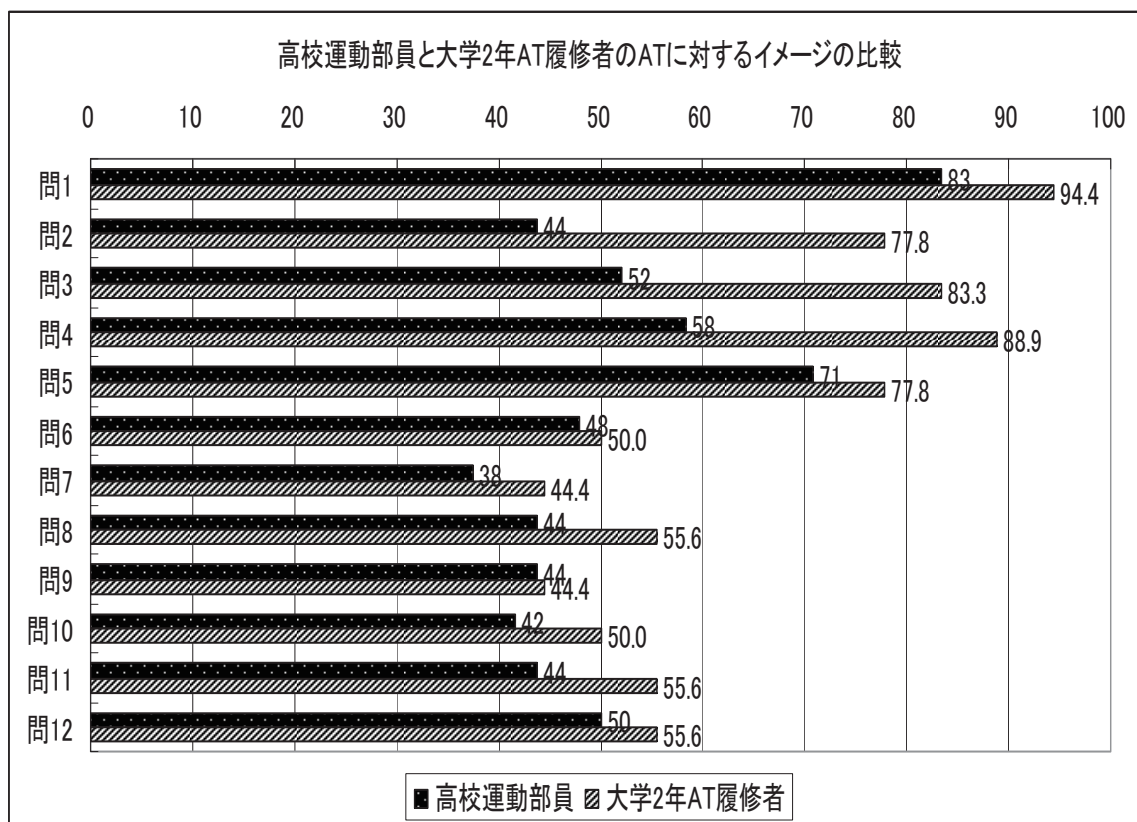
4-③「指導上の成果確認の方法」に対する回答は、A T履修1年生が61.3%に対し、高校運動部員が50.0%となり、差異がみられた。

以上の結果を総括すると、知識面においては「身体に関する知識」は双方とも重要性を認識しており、「運動の種目特性に関する知識」や「スポーツ外傷・障害予防に関する知識」については、A T履修1年生が重要性を認識していたのに対し、高校運動部員では、認識が低く差異がみられた。

技術面においては「スポーツ外傷・障害予防の技術」は、A T履修1年生が重要性を認識しており、高校運動部員は低い認識を示し、大きな差異がみられた。「ウォーミングアップや疲労回復等の身体の調整（コンディショニング）技術」は双方とも重要性を認識しており差異がみられなかった。また、「スポーツ外傷・障害の治療技術」は双方とも低い割合を示したが、双方の割合に差異がみられた。

「協力・責任・公正などの社会的態度」や「安全に対する配慮・準備に対する態度」ではA T履修1年生が重要性を認識しており、高校運動部員は認識が低く、大きな差異がみられた。「辛抱強さ・努力・尽くす姿勢などの個人的態度」の質問項目もA T履修1年生が重要性を認識しており、高校運動部員は認識が低く、差異がみられた。

指導上の改善の方法に関する項目は、「指導上の問題把握の方法」「指導上の工夫の方法」「指導上の成果確認の方法」のすべての小項目においてA T履修1年生が重要性を認識しており、高校運動部員は認識が低く、差異がみられた。



【図-5】 A T履修 2 年生と高校運動部員が抱く A T に対するイメージの比較

各質問項目の回答で「そう思う」と回答した割合を A T履修 2 年生と高校運動部員とで比較した。

1 知識に関する項目についての検討

1-①「身体に関する知識」の項目については、A T履修 2 年生が 94.0% に対し、高校運動部員が 83.3% 「そう思う」となり、差異がみられなかった。

1-②「運動の種目特性に関する知識」の項目については、A T履修 2 年生が 84.0% に対し、高校運動部員が 43.8% となり、大きな差異がみられた。

1-③「スポーツ外傷・障害予防に関する知識」の項目については、A T履修 2 年生が 94.0% に対し、高校運動部員が 52.1% となり、大きな差異がみられた。

2 技術に関する項目についての検討

2-①「スポーツ外傷・障害予防の技術」の項目については、A T履修2年生が90.0%に対し、高校運動部員では58.3%となり、大きな差異がみられた。

2-②「ウォーミングアップや疲労回復等の身体の調整（コンディショニング）技術」の項目については、A T履修2年生が86.0%に対し、高校運動部員が70.8%となり、差異がみられた。

2-③「スポーツ外傷・障害の治療技術」の項目については、A T履修2年生が66.0%に対し、高校運動部員が47.9%となり、差異がみられた。

3 態度や考え方に関する項目についての検討

3-①「協力・責任・公正などの社会的態度」の項目については、A T履修2年生が76.0%に対し、高校運動部員が37.5%となり、大きな差異がみられた。

3-②「辛抱強さ・努力・尽くす姿勢などの個人的態度」の項目については、A T履修2年生が66.0%に対し、高校運動部員が43.8%となり、差異がみられた。

3-③「安全に対する配慮・準備に対する態度」の項目については、A T履修2年生が78.0%に対し、高校運動部員が43.8%となり、大きな差異がみられた。

4 改善の方法に関する項目に関する項目についての検討

4-①「指導上の問題把握の方法」の項目については、A T履修2年生が64.0%に対し、高校運動部員が41.7%となり、差異がみられた。

4-②「指導上の工夫の方法」の項目については、A T履修2年生が68.0%に対し、高校運動部員が43.8%となり、差異がみられた。

4-③「指導上の成果確認の方法」の項目についてはA T履修2年生が52.0%に対し、高校運動部員が50.0%と差異がみられなかった。

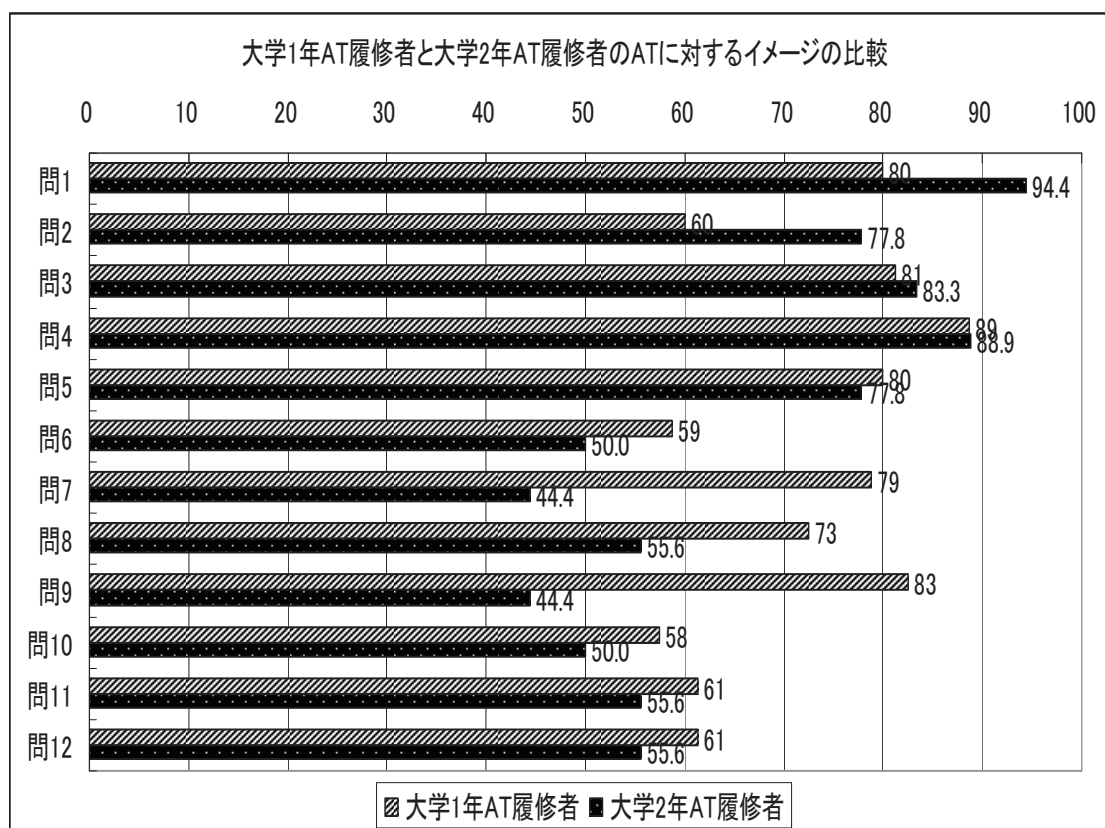
以上の結果を総括すると、知識面においては「身体に関する知識」は双方とも重要性を認識していたが、「運動の種目特性に関する知識」

や「スポーツ外傷・障害予防に関する知識」について、AT履修2年生が重要性を認識しており、高校運動部員は認識が低く、差異がみられた。

技術に関する項目は「ウォーミングアップや疲労回復等の身体の調整（コンディショニング）技術」では、双方とも重要性を認識していたが、双方の割合に差異がみられた。「スポーツ外傷・障害の治療技術」「スポーツ外傷・障害予防の技術」ではAT履修2年生が重要性を認識しており、高校運動部員は認識が低く、差異がみられた。

「協力・責任・公正などの社会的態度」と「安全に対する配慮・準備に対する態度」「辛抱強さ・努力・尽くす姿勢などの個人的態度」の全てAT履修2年生が重要性を認識しており、高校運動部員は認識が低く、差異がみられた。

「指導上の問題把握の方法」や「指導上の工夫の方法」の重要性について、AT履修2年生が重要性を認識していたのに対し、「指導上の成果確認の方法」は双方とも認識が低く、差異がみられなかった。



【図-6】AT履修1年生と2年生が抱くATに対するイメージの比較

各質問項目の回答で「そう思う」と回答した割合を本学科 A T 履修 1 年生と 2 年生とで比較した。

1 知識に関する項目についての検討

1 - ①「身体に関する知識」の項目については、A T 履修 2 年生が 94.0% に対し、A T 履修 1 年生が 80.0% 「そう思う」となり、差異がみられなかった。

1 - ②「運動の種目特性に関する知識」の項目については、A T 履修 2 年生が 84.0% に対し、A T 履修 1 年生が 60.0% となり、差異がみられた。

1 - ③「スポーツ外傷・障害予防に関する知識」の項目については、A T 履修 2 年生が 94.0% に対し、A T 履修 1 年生が 81.3% となり、差異がみられなかった。

2 技術に関する項目についての検討

2 - ①「スポーツ外傷・障害予防の技術」の項目については、A T 履修 2 年生が 90.0% に対し、A T 履修 1 年生では 66.6% となり、大きな差異がみられた。

2 - ②「ウォーミングアップや疲労回復等の身体の調整（コンディショニング）技術」の項目については、A T 履修 2 年生が 86.0% に対し、A T 履修 1 年生が 80% となり、差異がみられなかった。

2 - ③「スポーツ外傷・障害の治療技術」の項目については、A T 履修 2 年生が 66.0% に対し、A T 履修 1 年生が 58.8% となり、差異がみられなかった。

3 態度や考え方に関する項目についての検討

3 - ①「協力・責任・公正などの社会的態度」の項目については、A T 履修 2 年生が 76.0% に対し、A T 履修 1 年生が 78.8% となり、差異がみられなかった。

3 - ②「辛抱強さ・努力・尽くす姿勢などの個人的態度」の項目については、A T 履修 2 年生が 66.0% に対し、A T 履修 1 年生が 72.5% となり、差異がみられなかった。

3-③「安全に対する配慮・準備に対する態度」の項目については、AT履修2年生が78.0%に対し、AT履修1年生が82.5%となり、差異がみられなかった。

4 改善の方法に関する項目に関する項目についての検討

4-①「指導上の問題把握の方法」の項目については、AT履修2年生が64.0%に対し、AT履修1年生が57.5%となり、差異がみられなかった。

4-②「指導上の工夫の方法」の項目については、AT履修2年生が68.0%に対し、AT履修1年生が61.3%となり、差異がみられなかった。

4-③「指導上の成果確認の方法」の項目についてはAT履修2年生が52.0%に対し、AT履修1年生が61.3%と差異がみられた。

上記の結果を総括すると、知識面においては「身体に関する知識」と「スポーツ外傷・障害予防に関する知識」は双方とも重要性を示しているが、「運動の種目特性に関する知識」は、AT履修2年生が重要性を認識しているのに対し、AT履修1年生の割合が下回り差異がみられた。

技術に関する項目は「ウォーミングアップや疲労回復等の身体の調整（コンディショニング）技術」では、双方とも重要と認識しているのに対して、「スポーツ外傷・障害予防の技術」の重要性に関してはAT履修2年生の割合が高く、AT履修1年生は低い割合を示し差異がみられた。

「協力・責任・公正などの社会的態度」「辛抱強さ・努力・尽くす姿勢などの個人的態度」「安全に対する配慮・準備に対する態度」はすべて、重要性を認識しており、双方とも認識の差異がみられなかった。

「指導上の問題把握の方法」や「指導上の工夫の方法」については双方とも重要性が高いと認識しているのに対し、「指導上の成果確認の方法」の重要性は、AT履修2年生は低い割合を示し差異がみられた。

IV. まとめ

学生が抱いているATに対するイメージについて調査し、次の様な結果が得られた。

1. AT自身の能力について

1) 知識に関する項目は、AT履修1年生及び2年生とも「身体に関する知識」「運動の種目特性に関する知識」「スポーツ障害・外傷予防の知識」のすべて高い、あるいはかなり高い割合にあるが、高校運動部員では「身体に関する知識」はかなり高い反面、「運動の種目特性」及び「スポーツ外傷・障害に関する知識」は低くトレーナーサポートを受ける立場のものとトレーナーを目指すもの間には認識の相違がある。

2) 技術に関する項目は、「スポーツ外傷・障害予防の技術」「スポーツ外傷・障害の治療技術」はAT履修1年生、2年生ともかなり高い割合にあるが、高校運動部員では低い。「ウォーミングアップや疲労回復等の身体の調整（コンディショニング）技術」はAT履修1年生、2年生、高校生とも高い、あるいはかなり高い。これもトレーナーサポートを受ける立場のものとトレーナーを目指すもの間には認識の相違がある。

3) 態度や考え方に関する項目は、「協力・責任・公正などの社会的態度」「辛抱強さ・努力・尽くす姿勢などの個人的態度」「安全に対する配慮・準備に対する態度」のすべての項目でAT履修1年生及び2年生は高い割合にあり、高校運動部員では低い。これもトレーナーサポートを受ける立場のものとトレーナーを目指すもの間には認識の相違がある。

2. ATの指導力について

1) 改善の方法に関する項目は、「指導上の問題把握の方法」「指導上の成果確認の方法」はAT2年生が高いのに対し、AT1年生と高校生で低い割合にあり、「指導上の工夫の方法」はAT1年生、2年生で高く、高校生においては低い。この項目では、AT履修2年生に対し、AT履修1年生、高校生において認識の相違がある。

- 2) A T履修 1年生と高校運動部員が A Tに抱くイメージの違いをみると、「スポーツ外傷・障害予防の技術」「協力・責任・公正などの社会的態度」や「安全に対する配慮・準備に対する態度」等は A T履修 1年生が重要性の認識が高く、両者に認識の差異がみられる。
- 3) A T履修 2年生と高校運動部員が A Tに抱くイメージの違いをみると、「指導上の問題把握の方法」や「指導上の工夫の方法」については、A T履修 2年生の認識の割合が高校運動部員に対して上回り、差異が見られた反面、「指導上の成果確認の方法」については双方とも認識が低い。
- 4) A T履修 1年生と 2年生が A Tに抱くイメージの違いをみると「運動の種目特性に関する知識」については、A T履修 2年生がかなり高い割合を示している。その他の項目については、大きな差異が見られず、ほぼ同じ認識を持っていることがわかる。
- 5) A Tの役割には、①スポーツ外傷・障害の予防、②スポーツ現場における救急処置、③アスレティックリハビリテーション、④コンディショニング、⑤測定と評価、⑥健康管理と組織運営、⑦教育的指導の7つが挙げられ、これらの役割を果たす為には、運動の種目特性やスポーツ障害・外傷予防に関する知識も必要となり、A Tを目指す学生は、その必要性について深く認識していることが明らかになった。

以上の事から、今後の A T教育を行う上で以下の様な示唆が得られた。

- 1) 既に学生が持つ知識に関する項目や、技術に関する項目に対するかなり高い認識については、更にそれぞれの内容を充実深化させる必要がある。
- 2) 「指導上の成果確認の方法」の重要性については、認識が低いので、更に認識を深める為の指導体験を充実させる教育的介入の必要がある。
- 3) 「指導上の問題の把握の方法」の重要性については、更に認識を深める為の指導体験を充実させる必要がある。

V. 本研究の限界と今後の課題

今後この知見をより確かなものとするためには、以下のような課題があげられる。

- 1) 本研究は、対象者が200人以下の小規模な母集団によるアンケート調査であるために、地域性や対象者の競技レベル、トレーナーと関わった経験の有無等により、調査の変異ファクターを受ける可能性が考えられる為、ATと関わった経験のない対象者や、異なるスポーツレベルの対象者などの多様な対象者を含む。大規模集団においてATに対するイメージ調査を行う必要がある。
- 2) 本研究は、高校運動部員、AT履修1年生と2年生に行われたが、AT課程は4年間行われる為、3年生、4年生でどのように認識が変わっていくかを継続的に調査する必要がある。
- 3) 本研究は、調査研究であり、結果は実態の把握に留まる。今後、本研究で得られた示唆を基に、教育的介入を行い、介入的研究へと発展させることが必要である。

VI. 引用文献

- 1) 河野一郎, 「アスレティックトレーナー制度の歴史」 『公認アスレティックトレーナーテキスト① アスレティックトレーナーの役割』 財団法人日本体育協会 pp.2-5 2007
- 2) 山本利春, 「アスレティックトレーナーになる為には?そして就職する為には?」 『体力科学』 Vol. 56, No.1
日本体力医学会 p.102, 2007
- 3) 浦辺幸夫, 「スポーツ分野の医療チームにおける理学療法士の役割と課題」 『理学療法』 Vol. 22-9, p.1213 2005
- 4) 『文部科学省高等学校生徒指導要録各教科の評価の観点及び趣旨』, 文部科学省, 2007
- 5) 川野哲英, 「アスレティックリハビリテーションの考え方」, 『公認アスレティックトレーナーテキスト⑦ アスレティックリハビリテーション』 財団法人日本体育協会 p.8, 2007

VII. 参考文献

- 6) Kenneth L. Knight, *Editorial Hyposkillia & Critical Thinking: What's the Connection?* Athletic Training Education Journal; 3(Jul-Sep): pp.79-81. 2008.
- 7) 浦井孝夫, 他: 器械運動の学習目標に関する研究～小学校高学年児童を対象にして～, 『了徳寺大学紀要』 Vol. 2, pp. 55-67. 2007
- 8) 小西由里子他, 「学生トレーナーの活動の現状と将来展望」『武道・スポーツ科学研究』 Vol. 8, 2002
- 9) 山本利春, 「国際武道大学におけるアスレティックトレーナー教育」『国際武道大学紀要』 Vol. 20, pp. 63-73, 2004
- 10) 馬場宏輝他, 「日本におけるアスレティックトレーナー界の発展に関する提案-特に資格認定団体と業界団体の区別を意識して」『仙台大学紀要』 Vol. 39, No. 1, pp. 44-58, 2007
- 11) 伊藤政男, 浦井孝夫他, 「スポーツ・体育系大学の運動実技カリキュラムに関する研究」『順天堂大学スポーツ健康科学研究』 Vol. 6, pp. 14-30, 2002.
- 12) 『公認アスレティックトレーナー養成講習会、専門科目カリキュラム教育目標』(財)日本体育協会スポーツ指導者育成部, 2007

謝辞

本稿の上梓にあたり、増山茂学長、三方一澤学部長により、親切なご指導とご助言をいただきましたことを心より感謝申し上げます。